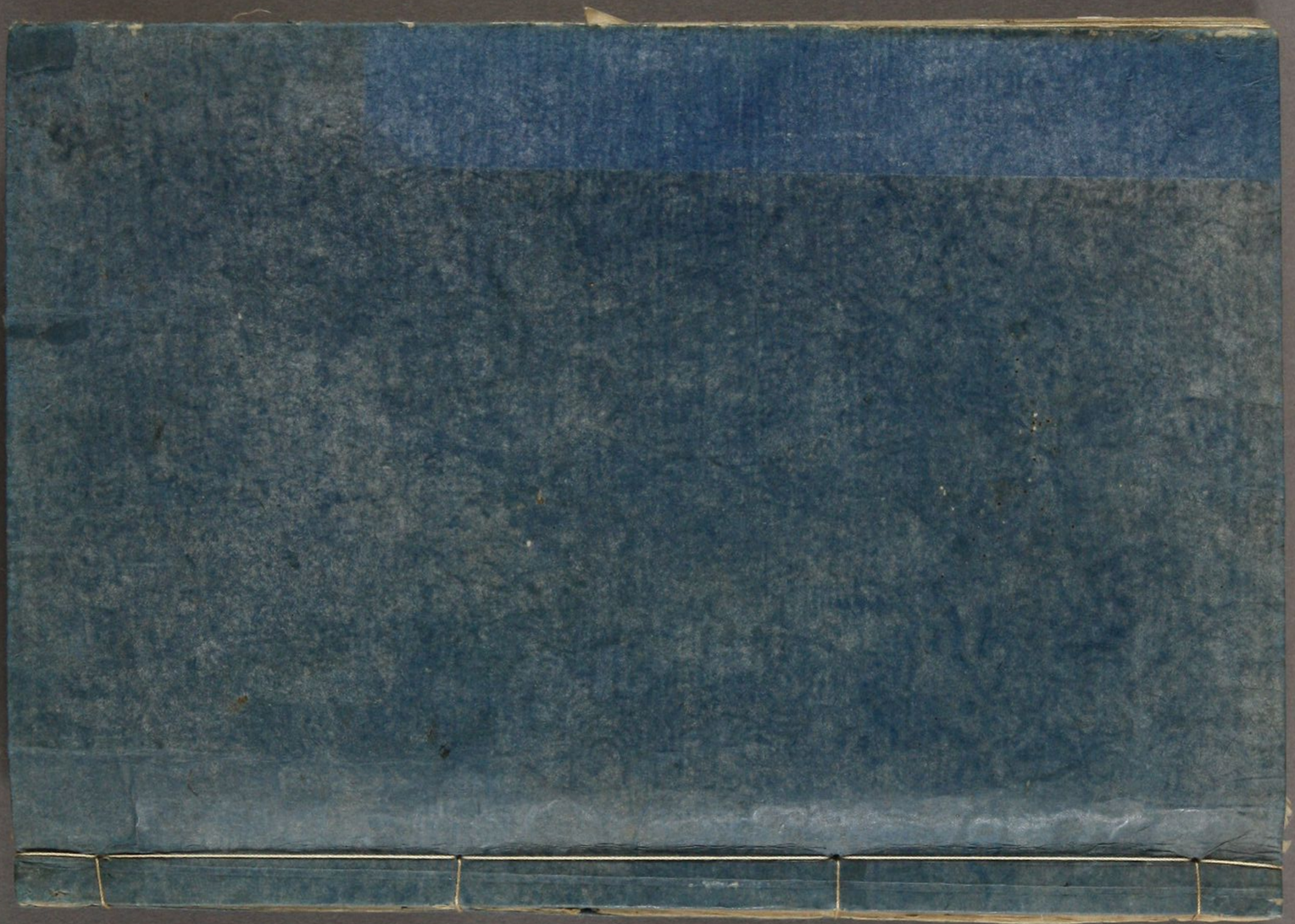

帝国図書館

業平の姉く

宮内庁書陵部

又男 吟風さこその秋いちしるき人のそ、
公明仁 文集四巻 紀四年若狭ニテ有汐汲
玉鉾の東屋人公
又女 汐くみ侘ぬ 枕くらうもそれさいとゝ人をとゝて
おのうら 汐くみとる 歌とちる花をも流れ落葉額歌
又男 汐くみとる 歌とちる花をも流れ落葉額歌
おのこゝを会せたるもをゝ和歌をゝ女の
ゆくゝとをゝ

十一
むら雨
うへうへ 秋の月 舟やさうびん花をもあ
秋ちゝ 秋ちゝ 秋の字すこゝてゝもゝ久宝
濁りてゝもゝ 秋のあ
そぎりいちゝ 秋の雫をま
よの雫を秋ことゝ祝ゝてゝあり

ひこや六今かい云載ハ事ニ紙ひねて粽ハ

云ふこわう

五十二

一菖蒲ー　ごぼうぢまこと　端午の粽をそこ

菰蒲ハ粽ニまきるこハなんぞや菖蒲ハ葉ハ香ひ有ゆへ粽ニまきて香ひをうつすなるべし

の糸ハてむすひくゝりて利ハ社にのぞく粽

あめうこわい江ハそまきひりう利ハ社にのぞく粽

そうひこ　端午の粽を菰蒲江ハる

五ニ江ハ五ハ紙ニ粽をこゝゝを江ハま

とふものひ又ハ糸をもつて利ハ紙ヲ

ハうこゝゝハてねふて粽ーたうとう

五十三

一菖蒲ー

あしくさ女物ニ付ものなり菖蒲ハ男ニ付ものなり

ハてくハとうの

ハうこた　ハてくハ物とう

小ハ多こゝ久ーこ

一菖蒲ー

ハやねふ粽をたう利ハ家や

玉ーん　菱ハ小ハ物ハ

我の端ハ大ニの家ハ

ハひこや海ハ玉ハ

一むかし男ありけり　その男
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 （業平好きの子おうなご）菊乙ほこ（ごと）ここて

（ここのへ）

（ここのへ）

（ここのへ）

すこつひねみそそうとこ
やそともろこん　今そそ
しのこう海採かいその句ゐまうへこと
此ことをとうて後海
ゐるこ秋のよう川
おりそこと　おとひとつ
大成福
ただ今
ワうへかうそ行ゐおあ

のこうく　家にそくく
この古今かい漬く今しま
のこにはゆのへかりくと
舟のくの字ゝ

六十一　昔男ありけり　家ゐ巳　牧家童子
そうゐの　業まのそ
をとこ　実かいそうけ
男にゐるとりて　吳下（ニト）
ひ男うこの使ゐく　業まこ字作ゝ寝（勅使）

そしこ宇佐の国いわう
志ぞうのくらみ人 祖業(ソゾウ)二官人といふ澤瀧麿いわう
て勅使の雛(ツイミ)送(ヲクリ)還(カヘリ)のおほせをかうぶり
澤瀧麿といふ勅使のもとへ参り趣(オモムキ)を告るおり
勅使の雛をうけとりてむこの人の祖のう
さ用ゐつ瓦橋のうへにて
そをる むこの人の祖のうんなをとう
ありそもう浜のこちかいひこうとなくて
橋かまぎの高かうやうに猿(サル)事をう ひらく

古今いひ伝へ
ひとおもてなまに有りて
左なき面もなりへし
一云 昔男ありけり 宇佐の使の村へ
(拾遺)その川を渡りけん人のいもとにおこせてるるの
うらん そこのむこの河を
その川を渡る女にて 深川に祓
(取るさかしき)
前栽多かり
女ども
名にしおはばあふさかの関水にかげをみえこそ
(取るさかしき)

こゝろそらなる　風流（タハレ）男の浪あるをたのまれも
ねこおぞ名あて　波のわをこゆる事を
ゆるし波すゝすれ　水縮かいあしを俤のこゝろ好ものゝ名にたて
そこそこあるまし　こゝろたえて又深川を女なら
ねて業平のうわきふうたれ浪あをとわをこゝろ
ぐねのうとの海探十九小名川眞小
あぐりそゝる風流浪波のわをこゝ義世こゝろ
らん鏡今こゝ

引云
まわりのこゝろ名いたちわ風流浪ゝるまゝ波を
わをこゝねりて　釣絹都合海探十七風流浪
肥後よわう深川銀ゝ眞小銀ゝ
ぐれも籠業の名面わをこゝのゝ
小ひをもう

一六十二
苗ゝ波をとゝをこゝろ女　物業平にまつる名也也
こゝ女ゝう
物雖のゝ
こゝろくやおこゝろ
ゝるゝ

そのことゝ人のことにつきて　嫁ぬくの玄を巧に
しての心ばえうつくして作也
鮮矣仁 論語

そとみし人　業平
陰陽和すると
古の匂ひいにしへ（故郷の梅に言ひおこせてよめる）
ぞくいにしへとそ　こけうくしき花の色
をこゝろしる人ぞなき　業平　何（エダ）（カラ）
をこゝろしるとよみたるよし歌たゝ

ひとりこゝろひて　ひ女聖文在り今
ゝへ　こゝろの句り左こゝろ
こゝやけ我にあるものをつて年月ゝ
まこゝろがあみ　我をいとひもてゆく年月ゝて
心ひをし我をとゝ公のまことゝ
ものまこと女をうしなひ
ぞち　ぞくく
一（六三）首世公つけう女　嫁したる女のうち
公信おしん男　業平ゝ句ゝ

我朝にては文　武二ツの道を備へ
ふたうの子を持給ふ時は　兄二人おはす内
さる事用（ヨウ）なければ
さぶらひ　二男目の子より幼の時より学問
をおつとめなさる
ことなり　世ごの人を指ていふ
をさ〳〵武士　業（ワザ）をもて氏ぐ
かゞみをそ
うへおいさきもち　業（ワザ）まうにおく

（ここで師匠　数学をおしへてゐる所へ
ついでゆく　数方の書を写してゐるところ）

さうく　しくこ
そこともさよひとこと　業（ワザ）を情願く
ら　れりけれ　ども
たゞうち白髪の
たゝへのぞみを　俤（オモカゲ）とも
そたつけしき
むぞ〳〵かゝうにて　ひ女　棘（バラ）松（マツ）のさゝを
うまひをたゝもおそぎふげの　両く

ねとて　寝るとて
こもろよ　こもろよ
おわてのこ　狭袴（サムレロ）
勾我を　まろ〳〵ん　宝法の稿姫（七ツキ）
世の中〳〵　そろう　伊勢ノ国
けぢめ　経目の字
一畜
昔男女ありけり　いとうにかしづきけり
ひそかに思ひてもあひねし
ぞくまやこ　ぞくまやこに　ひるまの公卿さんを

やしこ　やしこ
吹風よ　雨よ　雨をふらせて　風よ　雨よ
雨を　風のこと
むらにもあひたん　物をとこ
女　そうしてあの風ふいたら　玉簾たゞさばひま乗
へさ　そこへとわこ　乗人少てもゆ
こねよいやしもしとよくたこるし
一玉　昔おとこ　ありけり　京と生
おがて　雲と生　雲雨こしこ

女　二條の后
きのさきこさ　三位の
中将織物の
衣ほそやか　大きに
のそく
みすのうち　おりゐ
いこと　二条の后と淳和の后といこと
聞こえ給ふ　二条の
人知れぬ

仁女　二条の后
男女こもの
訪女の所こ
門分の
女いこ
女の何
ふもとの
松たかき
ひにゆ
ひの
業平　女こと
業平
女
行幸
仁和
(サモアラバアレ)
侍

いそぎ高き寺
拙僧をさの指南にて

いそぎ高き寺（後に法）
名せしと申す川にて
かくる小　ひろ古今ふ
称い文をとりにて
名の義し

ひ法門　法和元年
仏の御名を申すべきよし
ひ法門仏法小物語
五月八日　高家法律素志、稽古
寛永

寛永
すくせ　風世（ニンゼ）し
ひ男に初ぐるもの　業（ゴウ）ふ龕（ホダ）
法門さうかつけて　業ふ二年の后
（窓西）のをそうふし　碧巌（ヘキガン）集（ショウ）評唱（ハラ）
ひ男を流しつつ　流罪し但史い業流
罪のをそをもこまるをく
ふるしをふ
しつつ

女(おんな)をいぼうてこそて
くらにこめて
なまのくるるにすむ法の我ら
そうらふ　不思(フシ)議人と云物
ばうこ古今まで曲(テンシ)行
男の女に
男二人の
のまま宮
を宿仕
付のまゝ
主君
狩場
そもにぞ
そうとこゝろ
ありずて
ありこんの
すてと
かうてあり
女(おんな)一かしこまりの事

金(クラ)に押(ヨシ)領(コメ)傷(イタ)むく
ひ流罪
とつて
とこゝろ
のまたこゝろ
ひて
にて
ひの四
ひ流(ながし)
業(ごう)
ひ
ひ
ひ

うまこおりてとる
（三方ヶ原ノ）
をりてるや難波のかたやくさ（辛苦し）
かりるふし

きろて　感したるふし

一むら（六十ヒ）雲道遥（ヒウヨウ）した　ゆきの松ひく右今日に
咲花の河原に河せうようとあるも河の
うへ人形り

ちどち　ちどちとと云ふし

くつ〻弥　うちつ〻り

きさらぎ　二月より
河日の日　うちの日とふし
伊弥（三方ヶ原ノ格言也）　脚を在りまつ
ひろの乃ちのきし海とうらして雲千にかある
いこまこふし

くりうこそ色こ　くりうこそ色こ
この今雲のたちやすい花の梢をう
しとおりうり　くろ（カクス）潤くらしとい情（ヨセキ）
こまち雲のふし所今今のけこを雲のくすい

梢の雪死の林乃めくたりろくを祢くくたり
〳〵くくとし狂雲姫(ヨクユカ)住月云被(ヲヽ)あり黄泉
十日栄の砧に雪點(ヲヽ)秋乃色
一首(六八)
昔男初栄の里(ヲヽ)くくより住吉の郡住吉の里住
吉の濱　西をくろ乃住吉乃松
とうて
今ゝさゝれ乃住吉の海そ乃名くより住吉の里住
吉の濱　定家
乃可ゝて栄の花くく秋乃色とゝ住

吉の濱　乃可栄の咲花そしろくく秋の深き世
乃にあるとと今乃ゝ住吉の濱の脆(ヲヽ)
の名うかゝい前ゝとかあくく修行(ヲヽ)乃可ゝ
定家卿の詠(ヲヽ)をみしにげにとうひとして窓
不及顕昭(ヲヽ)云(ヲヽ)古人(ヲヽ)云住吉濱
一首(六九)昔男ありもう住吉の里にうりの使　勅使
使ゝ昔ハ岡ゝ(勅使)乃使をきゝて祢をゝセゝ住
吉をうゝ祢くくふゝ光孝天皇の御代かと
小し住吉(不慶)をうけゝて祢の使をきゝ

多くは史に洋(ヨウ)行(コウ)したり
或(ある)は　恬子(テンシ)内親王(ないしんわう)と又恬子の御(ご)女(ぢょ)、惟喬(これたか)親王と同母
四品侍従(じじゅう)紀(き)名虎(なとら)の女(むすめ)、静子(しづこ)内親王と同母
貞観(じょうがん)元年十月に斎宮(さいぐう)を退(しりぞ)き、同八年に仕(つかふ)奉(まつる)を
免(ゆる)されて伊勢(いせ)より帰(かへ)りし人の記(しるし)
十三年六月八日薨(こう)ぜられ
御(おん)年(とし)五十四(よそぢ)
姫宮(ひめみや)を一人(ひとり)産(うみ)給(たまひ)しが
御(おん)産後(さんご)の日(ひ)数(かず)
経(へ)ずして
御(おん)母(はは)
皇太后(くわうたいごう)宮(きう)
崩(ほう)ぜられ
御(おん)乳母(めのと)
従(じゅ)五位下(ごゐのげ)
紀(き)乳(ち)母(も)
も
御(おん)後(あと)を
追(おひ)奉(たてまつる)
なり

後(のち)に
業平(なりひら)の
昭陽舎(せうやうしゃ)
に
移(うつ)
されし
時(とき)
の
歌(うた)
に
後(のち)
の
ひつぎ
を
思(おも)
ひ
出(いで)
て
よめる
なり

おくれ
ゐて
こひ
わたる
ころ
の
ま
に
も
ところ
は
ものを
そこふかき
せ
(イヌヴィ)
の
ごと
(コ)
し
いでつつ
ぬる
かな

二日とつゝ秋　葉半伝(下巻の二百九の裏)
つゆそおもん　うら風(ウラ)ふくとも云破(ワリ)こと
日月の行めぐりけふ
云のこゝろ　今集(古今集)承安(ショウアン)三年(一一七三)
君にもるゝ瀧川乃(ノ)
こゝろ　詞花集(一一五一)　崇徳院(スドクイン)御製
女もそこいとおもしろき
ひとのもとにまかりて
もの申(マウ)すとて
こゝろたのしくあるよし
ゆめ
ゆめ分(ワカ)ぬ　ゆめ
ゆめとも
ゆめ
ゆめ
ゆめ

陌今絡ヶ去ゝに初ゆ君こそ陌師尚こそ
引ニ今 なまのこのおこそ白髪たるつゝこそて孫そ
和そおけ小ゆり 衣別在今
ゆふし 未寝(イヅカレ)おやこの句く
君やこー我や行を在かゆえすゆあゝうつゝ孫て
うこあてゝ 此今古今に無こあゝゆ人のよ
ゆとおう 云ふ君やこー我やりもへの二句
計ゆう此今二句の今恋鎮
うゝ世ゝ古此の君此(タイ)の尼村あゝ意に
時の月 うこゝとゆそゝ人 ゝ君ゝ変ゝつゝ
のゝそ歌ひのことそこ此
蝶小あゝ歌ゝゆこを又
ゝ此
ゝ尼こゝす公の雪にまこひ変うつてよ
ひ雪よ 我も公迷ひに衣ねこ変ゝ
取ゝ此ゝゝ来うゝこそ今秋こあよこ
古今小変取と世べ宮よとあ
四のこと此この今ゝけた 伊勢

一 昔男ありけり女歌よみこ

一 昔男ありけり女歌よみこ

一 菅雪 ―せうてこ 酒多く手作をたいてゝ

もてなす

あるじそこ又酒たうべて酒多くを又のこのたに

わりそみそこにいそしき月のうちの種の物を

名ゐそあるもの 公爲こ月作有種々善美

こゝに締結手ひの宴にいまよのなうら

一 菅雪 ―

名花やこゝろの心にあ〳〵稀なおの日多くくらし

海の小 ふへ海こそを泡てもあみにもあくてお

なおとの小蒲生のもうと服こ万葉にいとおも

ふこゝろこ心に酒物とおの日なきこゝろう

こそこあう拾遺中ふへこいのけ史れおの日

物をうひやりこしん仮と弟女(ヨトメ)と入うう

一 菅雪住野の回いあそこおしんと 菅史我

公任琴にのこりおもひさわてゐ
らんと云し

大淀の渡にをりてふるゝ
ふるよも　ヨ　生ふてふのよ
んの序く海松（ミル）をえの字に用てあり
ものごゝろ八歳ゟ父母の海くとふを強て文我
父もつゝこゝふ八ゐ三年ゟ海よの
栄に有るつゝくあひくゝ
ものごゝろ八歳ゟ父母の海くとふを強て文我
父もつゝこゝふ八ゐ三年ゟ海よの
栄に有るつゝくあひくゝ

とびてすて
放ちくびて手よ
せぬこと

男放ちるをあるこゝろてゝをんこゝろするゝぶんおもしこゝろ
和布刈（わかめ）て　遥のうらかをひ
ゆまんとてゝ　と三句ゐ
そんくあ又ゐ我舩のわ
ゐんくのこりくあとゞめて
の海千のこくうねこと
らんとよくゝひをゆ

女放ちるをあるこゝろてゝをんこゝろするゝぶんおもしこゝろ
若布（わかめ）ゟ生ふ海松和布（みるわかめ）
ちゝひもあるかん　ゆ
うきたゞうねこと

一首二條の后乃中宮
その乃舟こ矢觀十一年に
当代のそのの位をゆづりて
元慶元年十一月二日乃即位十宋日七年
壬寅四月九日宋月八年避位乃齢三
年己酉乃月廿一日薨去と出家院
御年三
みのをむ衣 乃包衣と出家女の御あを生を

陽成院
とうて源氏葵の上
宮あむくみちひき給
源氏の心をみちひき
又男 被小そやもつく
しづく乃 袖のみちひき
きり袖の波とあるもと
秋二条あひて乃ふりしく秋乃の雪
よにおふるまかこと女に
ゑもよ雪とよの
の舟い一世あるま

まで、この児屋根の命の末裔の氏人、小倉殿と申す人、又伝教大師の末の中の一人、三善の清行の宰相の子孫、二条の高倉殿の御ために、この物語を書き始めて、今に至るまで、ことごとく、啓き知らしめたり。されば、今、この物語を聞き、伝へ聞かん人、いかでか、昔のことを、今のごとく、思ひ浮かべざらん。

かくの如くの、ことの、ふしぶしの、その外、ことごとくを、添氏みづから、のこし置きたまへるを、ここに、書き加へたるものなり。

但、古の、その、ことばを、改めざるは、ただ、その、ことばの、そこなはれざらんがためなり。

かくて、後の世の、人々、この物語を、聞き伝へて、大事や、この、ことに、同じからんと、そしり、あざけることなかれ。

仮名の詞、

一首たもうの門　文徳天皇の田邑（タムラ）の山陵に納め奉るに依て此の門

女帝だくさ子　女帝小こ
義子（キコ）い志仁云の御子にて西二条右京（ヨシアツ）の
二女の嘉祥二年七月に父使三位の女御
小こそ々と天安二年十一月十四日（本ニ四日）に年を
みまそりけり　おりゐ
ます
寺祥寺　二科にあり弘法大師の弟子実雅
僧正開基し承和五年五月に
后順子達をし
みまそ　仏まし

さゝげ　法の
ちさゝげ　この程し
本の枝につけて　苗（ナヘ）
本の枝につけて　苗（ナヘ）
今は今のお枝（ヲエ）につくるもし
左右かゝいまそりけり　後京つゝゆき　素行
左京右相の一男多賀
年三月中二参議に任を同八年十二月十二
日に左大弁を兼を年三年し　女帝小天安二
年に年をそ迎りけり　後京観八年に薨

（ふさゝる生の若枝の義ならむ　もしくは枝の誤写なるべし）

ニテの大こゆき
雪ほと名利の文面二條
あり一るゝ百年百年ニテ（清和天皇の時
もちにわり一ちん
大悲等の浪音もそう一ん
こぞ已板当曽もそうろう
ろうそく事うー一ひ名ハ花仕
浪このこそう一名 弾
みずいぶんとものう
き何く

常州古河之文面二條
百年百年（清和天皇の時
花仕
弾
浪音
随身舎人古物の陸奥

名ハ花仕
浪音
弾
随身舎人古物の陸奥

たゞにてゆし一ずひ曲ものうへ一とゝ
まそこ苦をこゝこゝて苻冷のうた 苦をこ
さみて棚にて石にはこをつけこう
おう称花名ゆそう一ん 苻冷のうた
のの句をもい 公のこ
てもそうにいん
をあるれとゆう
しびもず浴こ
ゆとの内い公

苦をこゝこゝて苻冷のうた
苻冷のうた

一首八の中　三条氏の中
ここうの里　清和天皇第一の皇
女敦元を誕生し　延喜十三年六歳の時
親八十四年　小誕生
二首朱し
ぬるぶやう　二ケ和七ケ和かとあるも
ぬれほぐぐるの意　ぬまろこの和文
ぬかのこと　我三条氏の一門也
七ケ和の竹乃陰(カゲ)　ぬまろこの和文(ワブン)
七ケ里　六歳の竹乃陰(カゲ)にて云(イヘ)り
とこ仙家の竹くも
竹莖とも云
うへつ里　敦元六歳の時
文を張りかつ里ごと
ものの里　竹に寄乃
ものいはしとの
そいふこと　仙名の詞
竹のへ　中将のよこ　舟代乃

八十

一 昔をとろへくる老(おいすがた)に 葉ずゑ秋の風

ものつくづく志のそぞろの体にまぎれ義貞も

わかしとものへを 召にあひて筆を捨

ませを悟こ若をもとし〳〵人を書〳〵て後う

八十一

一 昔浜のおほいまちぎみ 左大臣源融公(とおるこう)

十二のとき六條の河原院をたてゝ

五年に住給ひ 年七年八月十三日来りて叢す

なも河のかたに六條つくりに なを川の下ゆる

石に六條少てもかもし

うろひさろ うろひさろ ゆもし

おもかのちくさ をとの落さし

みこたち　そこちかき　河原院のあるじ
このとのにおりゐてきこしめして　夜ふくるまで
かへりたまはず　あくるあさに
花とこそたち
枝をかへてもとまりけれ
いくしほの春をかさねて
やまひ枝垂の君乃志ほひおもほえて　夜ふかく
陸奥の国へ入立つ鞠舟如也如不容
陸奥にわかこころにもあらなくに別をおしき人乃
こゝろかな　此歌に陸奥の陸奥の浦をうつし
たゝを忘れて君を陸奥の浦にそへりて詠
我心いつ乃日にかうくるを約束とうくるをも
こゝろいかん　こゝろうく此君の詞
一昔うゑたるのみこ　久恒王　一乃子無
紀名虎の姫君と申す　少将に
たゆるなゆめ
みかせとの和にまゐれり　中務乃惟喬乃
御野(ミコ)あり
むかしむかしのこと　業平

その人の名ゝをにもち　業平王命をも
て二代前も不変伝給くゝもたゝ名ばを
いふうてなかゝりもう
狩ん狩ころもセく
かくのかゝさの家その院　河内国に狩
活（ナギサ）といふ有り活の家活院ゝ
ゝしにゝて　狩（カリ）
百首の内多人ゝ詠ゆゑ様ゝゝてゝゝを
ゝゝとり　源氏狩（ヨノロガラサニハサ）自揮（ニ）首抜（ノ）　三躰有

（ヒラ）
世ゝ人たゝそて様の前ゝりせい生のをいのとけうゝほ
唱ゝを狩（カリ）参を書し数を揮ゝ首に抜ゝ
てまいりそうゝさし
ちもいそゝとく様いかてたゝもうゝ世にのゝ久
しくゝゝ　業平の中ゝ狩に抜したゝを引ゝ
狩てゝゝり給ちゝをゝつめにおうゝをめてたゝ
むそゆゝの和を言ゝこのうゝのくちゝをそのうけをいはゝ公句
様ゝ有て世の伴ゝゝ
日し今世ゝゝにいゝてたゝゝ句ゝを

わきの方　定座（カタヘ）のちかく
みこにおそく成わたりほみそまりる　惟喬（コレタカ）業平（ナリヒラ）
の朝にて酒（ミキ）をまいる　定座（カタヘ）に移してし
くれをそうて　定座（カタヘ）に移してし
かりてしたかでづゝ（たゞ）ありて　月（ツキ）の出（イヅ）る
我いこたろう　たかそ
又言（いう）
なのはなの（たゞ）ありを　梅に渡もそろや七夕（ナヽユヘ）書（カヽ）つめい
しもまり

久（ひさ）しく　すこてよろ
ず　俳（はい）し
なく〳〵そろ〳〵　紀（き）
ふそ〳〵そろ〳〵　紀
ふそ〳〵そろ〳〵　紀
ふそ〳〵そろ〳〵　紀

たりさるもみやま
さとのたび　あり〳〵うつゝ
一ときにしてそひさきの
あしたとそゝふ　このゆふ
織女をまつていく夫の一年に一夜七夕の
事うけまゐらせ候面もとそ葉ま
す〳〵変に御座候事とあらひこそ
ふうてこそ　かしこ
伝次乃言へふうてこ

七夕
あり〳〵にまことも月のうてゝ心残りけて
ふとすもあり〳〵
紀里のわた〳〵今ゝ
小ぶねしてもろう今
とゝゆげての伺候
しりとは丹ふ面白しこ月のうてこ
ふ人のをまつひふ
を手向て学もたいてこ
月もいとを　学

浴衣カラ帷子雨

の心ろを申げてに言(たる)詞(こと)ゝ初(はじめ)の言(こと)行
しせう治祝(ほぎ)いの下(しも)の句(く)を上(かみ)の句(く)に
八十三
一首(ひとうた)みかせにそふひろひ
たゝまゝよりた　この歌(うた)の意(こゝろ)は
ふにつゝ行(ゆく)ゝ　みかせ(御狩)をせう(せよ)ふの言(こと)ばに
つゝそゝぐゝ　前(まへ)の手(て)を最(いと)宜(よろ)しくつゝ
むものゝことゝもをかろうて　何(なに)ぞにくゝとゝ
そと禁(いさ)平の心(こゝろ)は常(つね)にうひて今(いま)を歌(うた)
松(まつ)として第(だい)一(いち)むまとするの句(く)　妹(いも)の歌(うた)とたいたのま

も前(まへ)に　おも弥(いよ)むまことも世(よ)をおくゝ
もゝさ妹(いも)の歌(うた)たのまゝつゝかいかくる
和(わ)前(まへ)にまてみゝ　と弥(いよ)しおもひのまゝ
うゝつゝうひまろう
おほよのこゝろて　弥(いよ)たまつる
二月(きさらぎ)廿(はつか)三日(みか)　風光(ふうくわう)別(べつ)我(わが)苦吟(くぎん)多(おほ)苦(く)
今(いま)歌不須瞬未到曉種(うたはまばたきすべからずいまだあかつきにいたらざるにうゑ)
かいつゝ　此(この)ゝ　此(この)はしつゝく
貫島

さひのかたにゆづりおはしまし　惟喬親王いと近江
（このまよりもいと悩ましくなりまさるやうに惟仁（清和帝）を
位につけたてまつりたまひてけりとおぼしめしまけるひとの観十四年七月
小たの泉小野の家法名浄無と号を宣
年乃至二月たゞ二日に薨り栄五十に
七月に九日に和ちんとくし
さてさるべき小社　殿心の西坂本に
てーくる　この社に年
ぎわ
の心波ここ
みむろ　神宮ん坊をつくりて葬奉をいと

夕さりつ方とぞおはりぬる　年頃ありつる
ことをてい笑うとをも心
笑をえんとい　ふみ
小社にて小社とを
の宮うつたうをり
てこそ笑うとをおも
て　惟喬親王　笑
まうでんをくやしきをとうく
宮ら家笑う先里の
位かき小社の

（八四）
一 菅雪しらかしら

（八五）
一 菅雪しらかしら

ことぐの　祝をこゝろの何字こゝをもごのまゝ
に筆らんとてつゝけの何月何日何のつゝそのつゝ
なるの　ひとつゝとゝゝくゝと何こゝにひこゝに
常にてこゝろのつゝまゝにかくゝもゝくゝもゝ
ねがひ事にも希ゝくゝもゝくゝもゝくゝもゝ
とゝゝにの書のゝゝそゝらねがひ事ゝつゝ
てづくゝるのゝこゝろのつゝとゝこゝ月日をゝ
月日をゝこゝに今ゝに様ゝをくゝもゝくゝもゝた
かゝゝ人のゝにねがひをやゝせねゝにゝてゝをゝ

ばかりのゝをやゝをゝこゝ祝ゝをねゝとゝをゝこゝ祝ゝ
祝ゝ月日をゝせねゝ月日をゝこゝ祝ゝ
つゝをゝをゝくゝもゝくゝもゝとゝひ書の
ゝゝをゝ我ゝゝ筆ゝゝたゝうゝを祝ゝ
子淳(コノアツ)治(ユキ)ゝゝをゝおゝていふゝて祝ゝ(イカ)治書
君にたゞゝゝてゝもゝ
ゝゝぞ　淳(ツン)治(リ)
一首　ゝをゝゝそゝゝゝゝん　ゝゞゝをとゞ(ハナ)ゝ
今(イマ)までにこゝねゝ人ゝ世にゝゝゝのゝこゝねゝ年のゝね

ひろくてあり
なかにまつ人（かまくらの
そをたなうにて　葉ざま
葉のすけ　ろこのすけとも（衛府の佐
こを傍府にて中将
外傍府の佐よ
ひろくどこ客人こ
いづのこのくこも傍府の将（カミ）のくらひ

葉ざまの兄弟まうこ
観音ぢい
どざこのこ　そことい
おなじ
ろこ
ろうた　多在こ
せうかうじ　梨　少将
葉ざのくこ　弟ぎのこ

秋夜ノ
我世をそくるゝあをひの波の波ぃい
〳〵こたゝをん　まつうひの沖つ百し（アイタヌ）今下のもとの
あすうとまりの百そうにあ〳〵をを氏
妻へ友住もあそく村を多ひ我せし張うと
そう悔嘆の波とけ下の波とこのもゝそうさそと
ありう

あそび　紫ふまし
故こみぞう人今をかうしし宮のまくもちるゝ
紅のせそれよ　水の白まい水鼠を糸に愛ふる

をみぞうかえしかゝ水とに雪こ乱すへゝを
らんとし云宮とい浮かこちるゝい引し紅
のせそこい軍下の羽しこいかしのうにとろもたれ
迷悟こそもかまの
問しるも
かうへの人　うへの人印てかしくちひて少
あんかうをかそて降へいうまそうをしけ波ふ降
ゆうくみちをくて　布引の滝うち高屋へ

海の女二童

古来より有家の男

女子（おなご）

女子（おなご）

女子（おなご）

一菊月日
惜めども其の日の久留米の
公明こと三宅の海棠に猴今の又と入ら
てしろくもろこし女の手

一菊月日
惜めども其の日の久留米の
公明こと三宅の海棠に猴今の又と入ら
てしろくもろこし女の手

一菊月
霜をこぐ棚の小舟のたひらかに
人もあらし 船棚と

一菊月
霜をこぐ棚の小舟のたひらかに
人もあらし 船棚と

（やうて後に教訓と立主て業平ようあと二代八そとそ
あいひおこ世るをりしまそ
さてもそう）
ようくてあ
かく女のかをさてねいうきき
うるあしあきうるあしれまとそのし

ね　女どの立（やうて）ん
の男　業平ま
なまのさてをうちてのそみと
平代表（ヒョウ）史（ホン）（デミ）そ
約をもひうひろ
約のこと約て約（ヤク）
（ヒ）ん貧約（ヒン）滅（ヒロビ）約（ヤク）落（セヘ）薄（チ）約（ヨワ）とのくいし

ん（やうて）ん
海士（アマ）の
ん（やうて）ん
ん（やうて）ん
ん（やうて）ん

人ののろい事は
物事まで我も
のろいすてられ
とうとうなのれ
ゆうあとまでも
ふいて

むつけさう　業平朝臣の元服し給ふ日
そろ〳〵こさうそく

一（九十七）昔、西院の帝と申す帝おはしましけり。その后、二条の后、
観十四年二月に、冷泉院の御位に即き給ひぬ。
翌の年、観十五年二月に、冷泉院の御母、
二条の后、九条にも住み給はず、
東の五条に、大后の宮おはしましければ、
西の院にぞ住み給ひける。
後には、この后の宮、
冷泉院の御母、
皇太后宮と申しけり。

一（九十八）昔、男ありけり。京にありわびて、
東の方に行きて、住むべきところを求めむとて、
行きけるに、
武蔵の国、
入間の郡、
みよし野の里に、
いとおもしろき所を見つけて、
すみけり。
さて、
年ごろ、
よびわたりける妻、
京にありけり。
さすがに、
時々は、
文もをこせける。
かくて、
かの男、
身よりあまれる事どもなりければ、
この妻、
もろともにあらむと思ひて、
来なむや、
と言へりければ、
男、
いとよきことなりと思ひて、
喜びて、
迎へ取りてけり。
さて、
ともかくもあらで、
二、三年ばかりありけるに、
この男、
武蔵の守になりにけり。
さて、
この妻、
国の守の北の方、
いとやむごとなし。
さるに、
この男、
守の館に、
この北の方ありと聞きて、
いとねたく、
心うく思ひて、
この男を、
殺してむとす。
男、
この由を聞きて、
逃げて、
京へ上りにけり。
さて、
この妻、
国の守の館に、
男の来ざりければ、
いぶかしがりて、
人をやりて、
聞かせければ、
まことに、
男、
京へ上りにけり。
さて、
この妻、
いとかなしと思ひて、
我が身は、
この国の守の北の方なれば、
え行かず、
男の方に、
人をやりて、
言ひやりける、
歌、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

と言ひやりたりければ、
男、
この歌を見て、
いとあはれと思ひて、
行かむと思ひけれども、
え行かざりけり。
さて、
この妻、
いとかなしと思ひて、
我が身は、
この国の守の北の方なれば、
え行かず、
男の方に、
人をやりて、
言ひやりける、
歌、

一（九十九）昔、男ありけり。
二条の后に、
仕うまつる女の、
いとやむごとなきを、
年ごろ、
よばひわたりけるに、
からうじて、
盗みいでて、
いと暗きに、
来けり。
芥川といふ川を、
率て行きければ、
草の上に、
露のいとしげくおきたりけるを、
これは、
何ぞと、
男の問ひければ、
女、
答へもせで、
いとあやしと思ひて、
見るほどに、
雷、
いと激しく鳴り、
雨、
いたく降りければ、
あばらなる倉の、
あるを見つけて、
女をば、
奥に押し入れて、
男、
弓、
やなぐひを負ひて、
戸口に、
をり、
はや夜も明けなむと思ひつつ、
をるに、
鬼、
はや一口に、
食ひてけり。
あな、
いと心憂、
女を、
奪ひ取りて

忠仁公と申強ひ
つくもまつる雪　葉守の
翁が月　九月こ
梅のつくり枝　雪のふ
ゆこもる雪のむら消に
つゐ折むこふ春ぞとて　忠仁公のうたに
対しつゝ梅の花ありそめてもろもろの
花賀月物のこゝろ詞書あるも忠仁公よりはじめ奉りてもろもろ
それ〴〵のこゝろをとゝのへたてまつれり
たゞひとへ古今にならひ
仁公とつゞけたてまつれり
たゞうら　感じ
一むら雨をのこす場こ
ひをうの日　五月雨
仁義多紙ニ
利貞考寄居奇談ノ
ニヲ参考スベシ
九九
九九
付有こゝ、梅の花
ゆゑ有ものこゝろをとゝのへたてまつれり
たりひとへ古今にならひ
仁公とつゞけたてまつれり
たゞうら　感じ
一むら雨をのこす場こ
ひをうの日　五月雨
仁義多紙ニ

蹟射のもの三蹟射いる
荒ら多伝いお伝式でう
伝式こ百いたをの荒ら伝宿いたをの荒
ら伝ふこをいたをのまを
伝ふこら多伝ハら書ふ ひをういを来の会(今)
褐を引おこ来ふの(ひをうこ云ふ褐ハ柾(ケ)を
の称名のうふうさぐうたうわふ褐ハ生言ふ
称のもの
もりひにうてたう車 こ
こものの人の車く苦ハひ

をうの自おこ車多ろうこととそもうひにうそる
車とうふ六六のう場小乙殿屋(ヨトヅ)とそこ湯の
中お称の来ふ在をう華ふま乙殿屋に言て女の
六六の下篇ろうをうの(ふ)ことを乙ろ少ハ六ハ
称をくてうくもうこの(ふ)ふ(ふ)を又ろうをうこう
うこもうこととおりのうふ(ふ)ち和お称ハいこ自情
こものハ出てうふうこうこたうそもうあく
みす(今)もおふこをこもせ人の立ふふくハやあく
妄役ふこ玉甲製又ろ

一 昔男ありけり（教えぬ物ゆえひめこそ）
（教えぬ物ゆえひめこそ）
（教えぬ物ゆえひめこそ）

まらうとぞ　客人（賓）　まろうと
なん客をとて　なん客（ミナナシ）
ものまうけ　主設け
あるじまうけの人　設の人
あ　雅　こ小雅
おやこ　親
ものひ　物の
おやこのをとこ

おやこ　親
このかみ　兄
すまひ　住居
のぐ　野宮
ものいみ　物忌
みこそうて　御祓
ものいみ　物忌
百二一　百二十一
ものひらん　物干竿

ものぞく　一門をゝ祝族の下略こ
肖として生ふのゝ契ありをと世のうさをすて
雅遊に耐ゝてゝ　世をそむきて生風かのゝ
猶九世のうさをそかのようそ俗をうと通世をう
らやむこ

一首　荷雲かうはうゝをまねにぞちうう　志実弥心（ニメ　ビチコウ）
句をそゝるゝてい
源氏の門　作品三室前の庭池まに納ま
ゝるゝ庭池のこと

公方さまより　ゝに実弥ありとい
みこゝろ　作品天皇の
称（五今）ゝ私の美をそゝ面こまどろめそやそゝかにも
ゝまゝるゝ　一度ゝ
にのひゝ美にれんゝやこゝろ面くまとろゝて
ゝそをよくそゝ面こまゝるこひゝ
意ゝ実弥といゝ
さゝるゝのこゝろ面ばゝ
果羽といゝ

業はみつゝ拙判て

百四

一 昔ことありて　そこなる男　京を
（ここにしもかくしも）
こそかしこそこそとくもまことのむいみ糸に要さ
人の心をうれひありてそこひの心をいふ
人もわれ〳〵とつれ立ちて　けふで消て
こし消えを死にうけて
ありて　云ひ（十八ノ）
（四七ノ）

百三

一 昔男〳〵そこなる川に
（六ノ）
ものゝ姫君代々とそこなる
ひとゝい　百の年代にとそこなる

百四

一 昔ことありてそこなる男
おやゝそこなる
おやそこなるしを
おやそこなるしを
おやそこなるしを
世をうこのわまよ〳〵
和年を今日そこなる
とおもむし

百五

一 むし男〳〵
女
ひとつ
（六ノ）

鈴田川にお身投て亡
となし云伝へ奉りて
古今の頃古小二十年の
卜ひる村に江原風小
るをもひをもふてよめる
一首男あて贈る男 業平ま
もう男のもとへ有りける人 業平の妹
内記にありける若衆の敏行 父親乃年に
小内記下こて古内記仕子云々し

おく仁ーかう
とおもふに色をおもし
ことでもいひもらしを
しきし

返今 かへし男 業平の妹
かんをうれて 葉文を出し
返今 ほもしくの孫にまさる涙川袖のこひちてかな
しと前 ほもしくの孫にまさる涙川袖のこひちてかな
おう女をうけそ以うひ(ひ)ちて(て)おもて(て)漬(ひ)

古今十三の初出に業平朝臣の家に侍りける
女のもとにつかはしてつかはしける
(ハ)おもふこそ神もひつしの涙川流れてわれも
のもんとよめるを古今の歌にはの字なくし
も男も流す涙河とよめるをこゝにもて
古今十三の初出に入れるにや
業平朝臣
みるめにもかれぬと
思ふ人を恨みよう
(ニ)
そでぬれてあまのかるもにこの女を敏次郎の
(ホ)
(古今)
取てはなさぬよう
あまのかるもにたとへたるなり
(ヘ)
(古今)
初句を第二句にをきかへて我ゆゑに
おもふ人ふたりもつ
(ト)
(古今)
思ひの男 業平朝臣
(古今)
取てくらせる女の
まゝなれ 取てくらせる男のこゝろ

と女の我みをおもふ涙のあいそうもうあよ
つまやそとく
志とにわも　あのの向にとくおりて
とわてこし万葉に秋霧にとこへ
峠をうつ斧のこをうつ　そそと
云句の姫こ
一むら女郎花
風みだれ　人のをうの噪(サワガ)ぬをいう谷の句
の花句

あく田かい　男のあつまる所と女のよるを招てあ
ちこちまさこも　ふくめ人多くこゐ在女のふひきます
にくみてつう　物のりく野のりく田子宝小女ねと水のそそこそこくこゐくこゐくこゐ

むすめ
ともひあまりそれかし我ふるさとに
むすばひせよ　我ん
ふるさとへかへりそへ、結ひとわうこと
拾ふおにに告ぐることく人魂のおをとくく、
魂いみのをい祈れおふ神先結ひとめつま
のつま
はこのをこう度うみくて下ばのつまを結ひそ
へことまうこと死と云ふこと

女の人死ことをきゝ
古いおりうやしけ今そ知ことを
おといまことをきゝもつまひをこと
ことす今そわてつとひまふとく
下級のこと
ぞあること　作るがてこと
こゝる村の狭小紙あるに今とけざる
こゝといふ作うひこの場合十一ヶ条

[illegible]
汁うちに挽
結びこめし我下紐の今ともとけぬ人の恋ぬる

あうをう

又古
恋しとて[illegible]
おこうとうえてもえうえ[illegible]
ともへ[illegible]ん むうへ[illegible]

[illegible]
ひの法師十一にて[illegible]
又世うを初にまて[illegible]
[illegible]

葉うの除あり

[illegible]

一むかし男[illegible]
次この姫君の垣間見をうねうたた
ねびこんなう 女の[illegible]
小野ひくに喰へさの分あう(而ひく)
めうひこの南云小野つひをくく雁を
てこうのこのとをもう云今十四にうこう
とおう

一むかし男やもめにて ひとうあを綴(モメ)とて
葉ぬまを女のとの[illegible]

京坂ノ句ニ人生(ジンセイ)ヲ識(シル)ニ字憂患(ユウカンノハジメ)
ヨリ云　唐物(トウブツ)ニ
箱ニひとかたならぬ書いたるを云
もの　箱ニひとかたならぬ書いたるを云
ものゆゑ　箱ニひとかたならぬ書いたるを云
ものゆゑ　箱ニひとかたならぬ書いたるを云
ものゆゑ

小八一そ入くろ
わたはやけ　四門こ
ゆきてきおくらり
ゆるそ沙まくそらり
ありてこ
をのう鈴をとひりを
を六年九よ有うそれや
悩おりひ箱さひとつ
うそらねへ仰ちひりう

四門の年をおく
四門の年をの七、年
の年をのを、年
を六年九よ有うそれや
悩おりひ箱さひとつ
うそらねへ仰ちひりう
四門のの年こそ

ワこにそ年七有とそ四門の有
こにさうや有うそ西にて風雅のを
のこにわ〜ま世情百るまへさるへそ
六は沙年のまのこ
宝ま年廿四月十六日七年六年中て歳を
一重むり〜わさのわてこやこじまとゆ和て
奥井（ヨキ）敬所い奥云の仏わさのの
ての字この文字に花をのわてとわにう用
物うして年そうり出張ゆへ〜ゆる

名所（メイショ）の多（おほ）きに張（はり）うわるる動（うごき）に安（やす）き家（いへ）云（いふ）古（ふる）人（ひと）のほとゝぎすを待（まち）て
待（まち）てぞすとうたへる橘（たちばな）薫（かを）るを聞（きゝ）て名（な）人（ひと）のほとゝぎす
ふる雨（あめ）をこゝろ尽（つく）して待（まち）てつゝほとゝぎす
のこゑをもとめ里（さと）訓（をしへ）をうけとゝぎすと云（いふ）
神社（じんじや）ある梢（こずえ）をたのみ来（きた）るこゑを聞（きゝ）ては
とゝ過（すぎ）行（ゆく）勿怪（もつけ）改（あらた）まれども
行（ゆく）のあてあをやくうもの初（はつ）音（ね）のおぼつ
かなき幼（おさな）稚（ち）のかたりも

奥井（おくのい）を出（いで）て水（みづ）の流（ながれ）の末（すえ）をゆくに
みて行（ゆく）ほどに古（ふる）今（いま）に小町（こまち）とありけるうち
ありうち

一首（しゅ）

没（しづ）まもる家（いへ）もまばらに夏（なつ）の渡（わたり）
ひみく　この句（く）は久（ひさ）しくありねとそんこゝろの序（じよ）
こゑ長（なが）びきとゝ渡（わたり）をもたるに秋（あき）の景（けい）
づきたるの人（ひと）家（いへ）のひとしのつゝひこゝろ
小渡（こわたり）秋（あき）とありこゝに渡（わたり）にもたる秋（あき）の句（く）そ

にわすゝしてとう拾遊ひにいでゝわい
びてとうとう
おもふ人のもおくらんとおやまとことのかたしと
ありまの神こ語るもおろ〳〵おくれ給ふ人
かなもよくとめをんなの名のみ〳〵
年妄(マヨ)のをろう
一(百十七)むら山 おく住天台之天あそ三住そ竹幸一之う
我みてもひさしくなれ住吉の岸の姫松いく世へぬらん
ひわ松いわ松のうすこし万葉古に住吉と云く

すゝのそとゝありさま
ろうをこのもとう又法橋範玄に奥義抄に
高こ花帝住吉に行幸ありし時の古今十七かいなる人
とあり
たほ〳〵とげぶ〳〵しうして 住吉の神歌なり
一面とくげぶ〳〵しうい松ね
むめまと云い庭こ松をもし植ゝ庭
そあてふ むめまと云い庭こ松をもし植ゝ庭
ろうすや仏堂ろう瑠璃(松の名也)の名也せうふ

男紅葉返のもし
紙詠にいそう
一百十八 苔男ーまいうん　業平女のま（まいん
とあり
女 ま（ぐ（ぐ（ぐ

一百九 かくて人妻と互に相思のさまざまを書尽せるが人こゝろひかるゝ
一首男女の贈答也（こゝ）
人のつりとに思ひてもこゝろそて浪 ひ女子（ヲト）に
琴こゝろ
をしかの嶺鹿の冬ごもり 郎女人の猪の牧
の板ゐと猪を載て女の戸。ひ女我にいつも
ありてん（ふゝ）をつくたらも男りこ。
らんを和してありけり。六枚迄十九にこの句
ありつゝまの
一百十 むし男板屋より 内裏の西殿の名ゑ
板を板〳〵也ゝうり名ともも
当の歌を縫てゝ女をもくふ（ふゝ）
こん ありの歌のむこ女今うたに主殿を作ゝ
にゝて当の縫てゝ板の歌ごゝさゝ
のを少て板屋より出ゝ人可れを板とゝいふ
板を歌ゝうにゝりこゝをてゝあり
当の歌をゝて〳〵ゝいふものひをつけよりて
ゝさん ゝかゝゝゝこゝの歌々をゝゝゝを付

よみてつかはしける

一百九二 前栽に菊をうゑてあるじまうでこむ人に　約をたがへむ女

かし

一百九三 行方今 心ざしの千ながのまゆをよに経ひまれしうひも命も世のきり　心ざしの千ながのまゆをよに経ひまれし序をのみれ約をかへ

変しなむとおもふをよに経ひまれしうひも命も世のきり

くひあげをかへてむすびをよに経ひまれしうひもをかへ

たりむすめの好ける井ぐ死をもたる我を

ともにはあらじとよみてつかはしける

人ぐげをかへてむすびをよに経ひまれしうひもをかへ

のやうに少てたるおとこ女をもたる女

昔の約をかへて女のもとに

りて侍ける男ともどもに

女の心ざしとて

をおくりつかはしける

一百九三 菊花

年をへて住こし宿を

ありありん　ひ女の子をとられんとするに我すてゝ
いとゞおもきこゝろんと未のちをかのれといふ
女ノ一日
地とありしい鈴とありてゝ帰をこゝん俗にこゝやい
名いたこゝん　葉ちの女人
らふりあたゝ　ことやうしとこし恨いせず
歌こたる私をおいもみうしゝ弥にうせ
私にいひけるこれ公いは、俗私かもし
ゆうんとこゝをありこゝありこゝに
感ーてとひとまもるあり

百九四
一首雪ー
ふるゆきのこゝでこゝ少やこゝ我とひとこゝ
ありもこそ　此句面

百九五　参考橋・筆半の一ぶんとこゝをでばーめにえ後のうし
一首雪こゝろうしてゝ
ほの人の行方をいふ心にて涅槃のみちあり
ふるこゝろうしを　ほの人の涅槃（ハン）のみちあり
此今の行んとこゝとこゝを諸世の三
ありのこゝ古今十六哀情部かへし

事新所以作此抄者予壯歲之友告曰從古伊勢
物語集註段々次第頗依古人之誤多而中比京
極黃門改之尓来連續而諸抄流布于世攸訛雲
上仰花下咸雖無漏網鱗且詞林繁茂故雅子老
人忽忙之輩容易難窺之伏願除古来之或說擇
其善言求爲我尓新作抄云予曰肯之若述單詞
則何異日午燈乎強拒堅請則似無明友信也遂
詣古不作此物語豈有後人註釋之是非乎今又

予不作此抄爭招傍人之嘲乎由之取義在于此
吁惹得虚名滿世間者也正保二年孟夏望破笠
子誌